（第三種郵便物認可）消費税込み定価1ヶ月3,000円・1部120円　日曜休刊

マイウエイ my way

「表」と「裏」

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　16

先回の理屈っぽい文章と、カトリック教会の聖職者のユニホームであるスータンを着ている、真面目そうな私の写真はザンクト・アウグスティンで勉強した時の一面を確かに伝えているが、この「表」の一面にはちょっとした「裏」がある。2000年の歴史を辿ってきたカトリック教会は各時代にその時期の特有な課題に直面してきた。私が入会した1967年には主に二つの動きが教会に変化をもたらし、私にも大きな影響を与えていた。一つは60年代の学園紛争、もう一つは1965年に終了したカトリック教会の第2バチカン公会議であった。両方とも当然とされてきた慣習と教えに疑問を投げかけ、刷新を求めるきっかけとなった。

日本の学生に感じるギャップ

友達と議論

自己紹介で「私は60年代の学園紛争の学生です」というフレーズをよく使う。授業で学生にも話している。私が夜の挨拶でも「お早うございます」というのは、捻くれた性格の現れではない。これこそ、従来の社会情勢に対する反抗の精神を燃やしていた学生時代の想いを今も持ち続けていることの証です、と言いたいところだが、単なるへそ曲がりではないかと言われても仕方がないだろうか。しかし、哲学・神学を勉強していた時に芽生えた授業に対する批判的な態度は今でも残っている。

同級生と組んで、ある先生の授業を計画的に欠席したら、彼は怒って（実につまらない）講義を学期の途中で止めた。公会議が指示した礼拝の刷新を機に、好き勝手な形の祈りやミサを試して先輩会員に怪しまれたことも多々あった。

このような生意気な言動をする者を、若者＝馬鹿者と評価すべきかは別として、こうした時代を経て大学の雰囲気は明らかに変わった。私の授業という被害を被っていても質問も批判もしないのは、今の（南山大学の）学生である。「質問がありますか」と聞いても、「試験には何が出ますか」しかない。この違いを実感したのはあるゼミ合宿の時であった。かつて私が感激した60年代の代表的ミュジカル作品「ヘアー」のビデオを鑑賞した時、ゼミ生の半分以上は途中眠ってしまった。つまらない授業に対する、現代的な自己防衛策かもしれないが、このジェネレーションギャップにはやはり少しショックを受けたのである。